

マデロ革命

父親が手を回していたおかげで、守衛の監視つきではあったが、マデロは昼間市内を馬で動き回ることを許されていた。そうしたある日、マデロは全速力で隣の村へ逃げ込んで支持者たちに匿われた。翌日列車で北へ向かい、貨車に潜り込んで国境を越えた。その同じ月テキサス州サンアントニオで、獄中仲間と一緒に書いたサン・ルイス・ポトシ計画を発表した。仲間の一人はメキシコで世紀の詩人と呼ばれるラモン・ロペス・ベラルデであった。このマニフェストは革命を叫び、マデロを暫定大統領にして、農民やインディアンへの土地返却、政治犯の釈放を掲げていた。³⁶ マデロはこの計画に署名した日付を、彼がサン・ルイス・ポトシを出発した日、1910年10月5日に遡り、米国中立法への抵触を避けた。彼はメキシコ革命蜂起の日を11月20と定め、支持者のみならずPLMや中立的立場の人へも呼びかけた。³⁷

マデロがサンアントニオに到着するなり、民主主義モニターの編集長と会ったことを重く見た領事エルスワースは、他の領事の誰よりも早くマデロ革命を警告した。タフト大統領が任命した駐墨アメリカ大使ヘンリー・レーン・ウイルソンは、マデロは革命家であるが威厳に欠ける人物であるとして、エルスワースの警告を無視するよう国務省に忠告し、大統領選挙は公正に行われたとしてエルスワースと相反する報告をした。³⁸

11月20日、日曜日の朝マデロはガイドを含めた十人とリオグランデを渡った。そこでは叔父カタリーノが四百人の兵士を連れて待っているはずであったが、マデロが到着したときには誰もいなかった。叔父は来るには来たが、連れていたのは僅か十人、目標のシウダー・ポルフィリオ・ディアスを攻撃する人数ではなかった。彼はひとまず隠れようとニューオルリンズへ向うことにした。チワワ、ソノラ、タマウリパス、コアウイラ、ベラクルースでマデロに呼応した蜂起があったことは、マデロを含めた亡命中の支持者には伝わらなかった。最初の蜂起は失敗に終わったが、マデロは成功を確信していた。³⁹

エルスワースは一斉蜂起を十日前に察知し11月19日の夜、武装した集団がメキシコへ入ることを予測し、陸軍歩兵部隊にデルリオとイーグルパスの周辺を警戒する要請を出すと同時に、騎兵部隊、保安官、捜査官、シークレット・サービス、税関と移民局に警戒態勢をとらせた。しかしマデロが渡河した地点はエルスワースの予想に反し、イーグルパスの南東四十マイルの地点であった。このことは二日後、保安官の尋問に答えたガイドによって明らかになった。メキシコの治安当局は、マデロがまだメキシコにいることを確信し、間もなく逮捕すると言った。ワシントン駐在メキシコ大使は、マデロはエルパソに向かっている、恐らくフロレス・マゴン兄弟に会うためロスアンゼルスに向かうだろうと国務省に報告した。エルスワースはマデロのグループとマゴン主義者との間には接点がないことを確信していた。マデロは攻撃を断念するとすぐアメリカへ引き返し、サンアントニオに戻った翌日、ニューオルリンズへ向かった。⁴⁰

いよいよマデロがテキサスからチワワに入り、革命軍を指揮して、革命は新たな局面を迎えようとしていた。コアウイラ州出身のマデロはチワワの状況に疎かった。チワワの革命軍はイデオロギー、地域、あるいは個人的考え方の違いにより、いくつにも分裂していた。ガレアナ地区にはアメリカ政府による重婚の取締りを逃れたモルモン教信徒が入植していた。彼等は1905年のクレエル土地法による土地収用の恩恵を受けていて、この地方の自由農民から反感を買っていた。そのためフロレス・マゴン兄弟の信奉者が多く、勢力はあまり大きくなかったが、PLM革命軍の本拠地が置かれていた。PLMはマデロを裕福な資本主義者であるとして革命のリーダーとして認めていなかった。⁴¹

マデロが次の作戦を練っている間、PLMはバハ・カリフォルニアに戦線を拡大しようと試みた。チワワではディアス政権を倒し、メキシコの人民に自由をもたらすため、としたが、バハ・カリフォルニアでは、無政府主義に基づいた地域社会を建設するためであった。武装集団を構成したのはメキシコ人、カナダ人、様々な経歴をもつ米国の急進的で無政府主義を掲げた労組IWW (Industrial Workers of the World) のメンバー、ウェールズ出身の報酬目当ての元軍人、そして、米国海兵隊の脱走兵からなっていた。まず十五名のメキシコ人フェビアン社会主義者のグループが1911年1月28日、メキシカリを占拠し、二月の初め、アルゴドネスとテカテを支配下に置いた。⁴²

一月から二月の初めにかけて、マデロは自分がメキシコへ踏み込むのに合わせて、チワワ革命軍にフアレス市攻撃を呼びかけた。オロスコはこれに応じたが、作戦を進行するだけの武器を持たず、果たせなかった。その上、マデロが総指揮官にホセ・デラ・ルス・ソトを任命し、自分はその下に入る事を知ったオロスコは国境から引き上げて本拠地ゲレロ山中に引き上げてしまった。⁴³

1911年2月14日、マデロは百三十人を連れて終にメキシコに入った。マデロを待っていたのは僅かな数の革命軍、しかもその多くはマデロではなく、フロレス・マゴンに忠誠を誓うプリシリアノ・シルバが率いる三百人ほどの部隊であった。シルバがマデロを指導者と認めないと声明すると、マデロは兵士に向かって熱弁をふるい、シルバと彼のグループを武装解除し、国境の北へ追いやった。マデロはオロスコやピヤを待つことなく、戦闘経験のない数百の兵でカサス・グランデス攻略を試みたが、連邦軍救援部隊に背後から攻められ失敗した。しかし、彼が示した勇敢な戦いぶりは彼の追隨者に強烈な印象を与えた。

44

マデロはこのとき腕に傷を負った。血まみれになったマデロは応急手当をしようとアルコールと包帯を求め、近くの農家のドアを叩いた。中から一人の東洋人が顔を出した。この男は福岡県出身中野金吾であった。村井謙一のパイオニア列伝によると、「・・・厚顔十五歳で支那船により、サリナ・クルスに上陸して、オハケニヤ初期の入植をする。まず森林を切り倒して、キビを播くんだが、監督の奴すごく厳しいので、すっかり参ってしまい、三名の同邦と六ヶ月で夜逃げする・・・メキシコへ着いたときには四十ペソ所持したが、

停車場へ行って機関車夫に手まねきで頭をさげ、金がないけれどもチワワへ行きたいと嘆願したら、アメリカ人の老機関手がよろしいとゆるしてくれ、車中でも毎日食物を与えてチワワまで届けてくれる。同市の思い出は、富豪宅で下男していたら白人の美人娘がここに塵があるから拾いなさいと足で示したので、さあ大和魂が治まらず、ついにその金髪女をなぐり倒して出奔し、警察の御厄介になったがその署長の友人に、子供のない夫婦者で敬虔なクリスチャン家庭があり、その一室を借り毎日その前を掃除するのですっかり家主夫婦のお気に入り、『お前さん洗礼を受けてクリスチャンになってくれ』と立派な洋服を作り、ある日曜日、教会で受洗する。『さあ今日からあんたはわれわれの児で在るから』と、自分等の部屋つづきの上等のルームを与えられ優遇せらる。

毎日遊びにいつているわけにもいかぬので、某看護婦長の宅に働きつつ、下男なれども看護術を学んで免許状をとり、病院に忠実にやっているの、退院できる全快の患者ももつと金吾の世話になりたいと退院をのぼすほど有名でありしたわれていた。

革命が勃発した時、ちょうど休暇をもらって一日本人が働いているカサ・グランデという農場で休息していたが、その夜反官軍が教会の鐘楼と地下よりとの大激戦を展開した。折から農場の門前にアラモスの大樹があり、その樹下に数人の高給将校がたむろしていたが、交戦中門がこわれるほど叩くので開門したら、血みどろの腕をした小男が『アルコールと綿をくれ』と懇願するので、本職の金吾さん早速あざやかに治療したので、感心した将校は『自分はフランシスコ・マデーロである。君は今日より僕の軍医となってくれ』と頼まれ『自分は病院に職がある』と八方拒絶しても聞かれず、ついに連行され、すぐ軍医大尉の正装をあてがわれ、革命の元首近代メキシコ開明の親であるマデーロと形影のごとく転戦し、彼が北米へ武器の仕入れに向かうや、ピヤ将軍に推挙せられ身をもって参謀の幕下に活躍した・・・次に北米へ渡り、探偵学校で数年勉強し、ティファナの警察に職を受けて二十年間在職し、同市の検察方面に大いに功あり、その探偵部には創設者として同氏の写真が掲げてある由。『村井さん、革命の功労者としてこんなにたくさん勲章をもらっています』と、立派な箱に並べられた三個の当国政府より授与された燦然たる有功、従軍の諸章を見て、当国の黎明に身をもって参与した先輩の赫々たる偉勲に敬意を表して辞去する。」⁴⁵

1 1月から翌年3月にかけてピヤはオロスコに次ぐ指揮官となっていたが、オロスコと反目してサン・アンドレスに引き上げた。彼の部下はほとんどがこの地方出身であったので、彼は皆を帰宅させた。ピヤは連邦軍が近づいていると警告を受けていたが、弾薬を運ぶ列車であると思ひ込み、これを無視した。連邦軍の奇襲を受け、なす術もなく数人でパリケードを築いて応戦し、夜陰にまぎれて山中に逃れ、殆どの馬と物資を失った。山中で寒さに震えているピヤのもとに、ちりぢりになった部下が新兵を連れて集まってきた。彼等は近隣のアシエンダを襲い、馬四百頭、金、武器、物資を集めた。⁴⁶

ピヤは十分な兵力を蓄えたと判断し、チワワの主要都市カマルゴを攻略した。連邦軍の

抵抗は激しく、最後の兵舎を攻撃中、連邦軍救援部隊が到着し、ビヤ軍は再び撤退した。それにもめげず今度は攻撃先を、より大きい町パラルに定め、様子を見るためにビヤはアルピノ・フリアスを伴って町へ入った。ビヤは以前この町に住んだことがあり、顔見知りが出て危険であった。案の定、昔の敵に見付かり、友人の牧場に逃げ込んだが、百五十人の連邦軍に包囲された。ビヤは銃を放ちながらフリアスと別れ、必死に逃げた。ビヤはやっとの思いで野営地に戻ったが、そこには誰もいなかった。フリアスからビヤは死んだと告げられ、皆これまでと解散していた。ビヤが生きていたことを知ると、全員戻ってきた。このとき部下は七百人に達していた。ビヤはラ・ピエドラで彼を追ってきた百五十の連邦軍を破り、最初の勝利を得た。1911年3月、ビヤはよく訓練された七百人を連れてブスティヨスの野営地でマデロの指揮下に入った。折からマデロの権威が揺らいでいる時で、ビヤは頼り甲斐のある補佐官となった。⁴⁷

マデロはオロスコから挑戦を受けていた。オロスコはPLM軍を武装解除するようマデロから指示を受けたが、これを断った。オロスコはマゴン主義者を支持していたが、それ以上にマデロの力を弱めたかっと思われる。マデロはビヤに頼るしかなかった。武装解除に流血は避けなければならなかった。革命軍内部に亀裂がはいったことを宣伝材料にされたくなかった。ビヤはマデロに忠誠を誓い、彼の独創性を遺憾なく発揮した。ビヤは駅で、部隊を列車に搭乗させる儀式を行った。物珍しさにマゴン派の将校と兵士が集まってきた。ビヤの合図とともに、ビヤ兵は一斉に銃を持たない彼らに跳びかかり、全員を取り押さえ、一人の命も落すことなく武装解除に成功した。オロスコや他の革命指導者はPLMやマゴン主義者と共に戦ってきたので、昔の仲間を裏切る事に躊躇したが、ビヤにはそのようなしがらみはなかった。それ以上にビヤはマデロに心酔していた。ビヤにとって、マデロは教育があるにも関わらず驕ったところが全くなく、誰にでも優しい態度で接し、正直で、小さな身体にもかかわらず勇敢であった。⁴⁸

マデロがメキシコに入ると、モレロス州のサパタ、コアウイラ州のカランサ、そしてソノラ州でも革命の火の手が上がり、三月に入るとポルフィリオ・ディアスにとってチワワだけの問題ではなくなっていた。4月1日、ディアスは約束していた改革を発表し、大統領その他の政府主要ポストの再選を禁止し、大農園を解体し農民に土地を割り当てる農地解放を発表した。同時にリマントゥール以外の閣僚を入れ替え、不評な知事や市町村長を解任した。4月21日、悪評高い副大統領ラモン・コラールは国外退去を命じられた。⁴⁹

全てが整然と組織立ってはいなかったが、マデロが二ヶ月ほど革命作戦を指揮した結果、全国各地で抗争が着実に根付き始めていた。この時点でアメリカ政府は武器の禁輸措置をとっていない。二月から三月にかけ、武力衝突は倍増した。鉄道線路や電信線への妨害で、連邦軍の動きは鈍かった。四月になるとメキシコ市の南に位置するモレロス州で農民指導者エミリアノ・サパタが蜂起したのを初め、叛乱は十八州に広がった。マデロは十四項目の要求を掲げた。それらは、革命戦士への給料の支給、政治犯の釈放、閣僚の任命権など

であった。ディアスの退陣こそは要求していなかったが、退陣が必要である事は明らかであった。50

4月、全国各地で更に蜂起が報ぜられ、マデロは勝利を確信し、フアレス市攻略を決意した。4月7日、マデロ軍は北へ進軍を開始した。オロスコとピヤが其々五百騎の二縦隊、その後にマデロが率いる千五百の騎兵が続いた。行軍はあたかも凱進行進のようであった。数週間前敗退したカサス・グランデスを難なく陥れ、数日後、革命軍は抵抗を受けることなく市を三方から包囲した。七百の連邦軍守備隊はアメリカに通ずる道以外の道路を全て遮断された。革命軍正規部隊は初めてゲリラ戦法を捨て、連邦軍と対峙した。51

マデロはフアレスの連邦軍に降伏を求めたが、指揮官ジェネラル・ナバロは拒絶した。ナバロはマデロが全面攻撃に打って出るのを躊躇すると予測していた。フアレスでの市街戦は流れ弾でエルパソ側に死傷者を出す危険が十分にあり、アメリカの介入を呼び起こす恐れがあった。勢い込んだマデロはそのために躊躇した。更にディアスはマデロの家族を通じて、和平を求める圧力をかけていた。財務相リマントゥールは革命が長引くことによる国際的な信用の失墜を恐れた。アシエンダの所有者も同じく、連邦軍に自分たちを守る力がないのが明白である以上、ある程度犠牲を払っても早急に和議を結ぶ事を望んでいた。これに反し現地にいない軍の高官、特に傲慢なジェネラル・ウエルタは過去三十年余りそうしてきたように今回も反乱を鎮圧できると高言、和議により軍は面目を失うと猛反対した。52

1911年3月の二週目、ウィリアム・ハワード・タフト大統領はアメリカの国防衛のために二万の軍隊を配置し、艦船によるメキシコ沿岸の警備を発令した。ディアスの駐米大使フランシスコ・デ・ラ・バッラはタフトの意図は、国境の警備と武器などの不法輸出の取り締まりにあり、メキシコに敵対するものではない、とディアスに報告し、同時にアメリカに百万という好戦論者を刺激する恐れがあると警告した。53

ディアスは強硬論を唱える軍部を退け、リマントゥールの意見を取り上げて革命軍と交渉をするためフアレスに特使を派遣した。革命軍の内部でも同じように、攻撃か和議で意見が二分した。人道主義者で流血を嫌悪するマデロは、部下の指揮官に反対してディアスとの妥協を考えていた。後に生ずるエミリアノ・サパタとの関係のように、マデロは農民運動が収拾できなくなることを恐れていたし、アメリカの介入についても不安を持っていた。停戦を求める家族からの突き上げもあり、マデロはフアレス攻撃を遅らせた。マデロがディアスを留任させる条件で交渉しているとの噂がエルパソの新聞で報道されると、数日前まで煮えたぎっていた革命軍の士気は停戦を境に衰えを見せ始めた。食糧や物資が不足し、約束された賃金の支払いもなく、不満は高まっていた。54

4月30日と次の日、マデロと彼の家族の代表者及び副大統領候補フランシスコ・パスケス・ゴメスを中心とした革命指導者が討議した。議題はマデロが4月22日に同意したディアスの即刻退陣を明記していない協定を認めるか否かについてであった。マデロは明

記するまでもなく、ディアスは退陣すると考えていた。この会議でマデロは、ディアスの即時退任を和議に盛り込むことに合意させられた。マデロはリマントゥールの使者フランシスコ・カルバハルに、和平交渉はディアス退陣が条件である事を告げると、交渉は決裂し、5月7日、休戦は終わった。マデロは戦闘再開を拒み続けた。55

マデロはディアスが辞任する事を感じ取り、浮き足立った。彼は、国に対して反対するのではなく、導く必要があることに初めて気が付いた。彼はよき指導者とは寛大であることとしか理解せず、ディアスに退陣を求めるときには、痛みを与えないことで、流血を回避しようと考えていた。ディアスは五月七日、革命が拡大していることを認め、自分の良心に従って、時が来たら退陣し、国家を無政府状態に陥れる意思は毛頭ないと声明を出した。56

オロスコとピヤは南に撤退する事は連邦軍の士気を高め、革命軍は戦意を喪失するのみであると考え、不服従を決めた。一度戦闘が始まるとマデロは全軍を投入する以外に道は残されていない事を知るのであろうと二人は見ていた。オロスコとピヤは連邦軍に向け射撃開始を命じ、連邦軍もこれに応じた。マデロは必死に止めようとして、ナバロに使者を出し、応戦しないよう求めた。不利な状況の連邦軍はこれを受けて中止したが、革命軍の射撃は止まなかった。ナバロ側も応戦した。マデロは最後の試みをして、カストロ・エレラに白旗を持たせて向かわせたが、今度は連邦軍に無視された。この間オロスコとピヤはマデロに捉まらないようエルパソに逃げていたとも伝えられている。57

オロスコがマデロに会った時、戦闘は既に止めることが出来ない状況で、マデロは全面攻撃を命ずるしかなかった。勝利は間違いないと思われたし、とりあえず自分で可能な限りの停戦を試み、アメリカ軍の介入もなかったことで、マデロはオロスコに同意し国境都市の占領を命じた。エルパソの丘では群集がフットボールを観戦するように並んで戦いを見ていた。川向うへの発砲を禁じられていたので、エルパソで犠牲者は出なかった。オロスコ軍は北から、ピヤ軍は南から攻撃を加えた。双方とも多くの犠牲者を出した。連邦軍側は最早機関銃が使えず、手りゅう弾で応戦した。戦況は絶望的になり、ナバロ軍は二日も水を飲まず、抵抗は限界に達していた。戦いは5月10日まで続き、その日の午後二時三十分、ナバロは降伏した。革命軍は最初の画期的勝利を収めた。58

この勝利は部下の不服従によって得られたものであったが、三日後、再びオロスコとピヤはマデロと衝突した。ナバロはセロ・プリエトの戦いの際捕虜になった革命兵士を銃剣で刺し殺した。革命軍は連邦兵士の捕虜を殆ど例外なく助命していた。ジェネラル・フアン・ナバロは革命軍兵士たちの憎悪的であった。フアレスに突入した革命兵士は口々にナバロを殺せと叫んだ。サン・ルイス・ポトシ計画には捕虜を殺害する違法行為をしたものは処刑すると謳われていた。マデロはナバロを保護することをはっきりと言明した。オロスコはピヤを訪れ、協同でナバロの引渡しを求める提案をし、ピヤはこれに同調した。それから起こったことには様々な説がある。歴史家エンリケ・クラウゼによると、マデロ

がディアス連邦軍司令官ジェネラル・ナバロを処刑しないと決めたとき、パスクアル・オロスコとパンチョ・ピヤは激しく抗議した。このときピヤはマデロに銃口を向けて脅した。マデロは「自分はお前の上官だ、撃つなら撃て」と言うと、ピヤは涙ながらに許しを請うた。しかし、ピヤは心底、あのスペイン人は吊るすべきだと思った、としている。⁵⁹

別の話では、オロスコとピヤと一緒にマデロの司令室に入った。オロスコは軍法会議にかけるためにナバロの引渡しを求め、革命兵士への給金支払いを要求した。更にマデロが、もとベルナルド・レイェスの支持者で、ディアスの議員であったベヌスティアノ・カランサを陸軍相に任命した事にオロスコは抗議した。マデロがこれを拒むなりオロスコは銃をマデロに向けた。マデロの支持者がすかさず銃でオロスコを脅すと、その瞬間マデロは外に飛び出した。マデロは自動車の屋根に飛び乗ると、外で待機していた兵士たちに向かって熱弁をふるった。数分後に兵士たちは歓声を上げはじめた。この時点でマデロはオロスコと握手を交わし、ピヤもそれに倣った。マデロはナバロと彼の衛兵を車でリオグランデの川岸まで連れて行った。⁶⁰

ピヤによると、オロスコはマデロの事務所に入ってから数分後、顔を出して待機していたピヤに衛兵の武装解除を命じた。マデロが処刑に反対したからだろうと思ったが、言われたとおりにするしかなかった。マデロはすぐ飛び出してきて、「パンチョお前も反対するのか」と言った。自分は無言でオロスコの命令を待っていたが、オロスコはマデロの背後で「ノー・セニョールお互いに理解しましょう」と言った。恐らくオロスコがナバロ処刑を説得できなかったのか、マデロに押さえ込まれたかのいずれかであると思い、武器を元に戻して自分の宿営に戻った。後に、これはオロスコが仕組んだ陰謀であったとピヤは信じるようになった。ディアスから報酬を引き出す密約をしたオロスコはマデロ暗殺を企み、自分を巻き添えにするつもりであったという。マデロに反対した以上、自分は彼と行動を共にするしかなかった。少なくとも違った行動をする方法には限りがあった。オロスコはマデロを撃つ勇気がなかったのか、最後までやり遂げることをせず、自分の性格を承知の上で、衛兵を武装解除させ、自分が首謀者であると思せかけ、マデロが自分に面と向かってきたときには、マデロを撃ち殺さざるを得ない状況に追い込む腹であった。オロスコは何もせず、パンチョ・ピヤを正真正銘の暗殺者に仕上げる狡猾極まりない計画を立てていた。これを証明するものは何も無いが、全く根拠が無いわけではなかった。その頃オロスコはディアスの代理人と称する二人の男と四度にわたって会っていたことが知られている。マデロもオロスコは外部からの影響があったことを仄めかしていた。もしそうだとすれば、オロスコは金目当てではなく、当時人気のあった彼自身がマデロの後継者になろうとしたことは十分考えられることであった。⁶¹

マデロがナバロを生かしたのは、間もなく自分が指揮を取るようになる連邦軍の間で支持を取り付けたかったとも考えられる。マデロが署名する和平条約には、北方各州から連邦軍を引き上げ、革命軍は武装したまま元のリーダーの下で治安維持に当たる、としてあ

ったが、他の地域から連邦軍を引き上げ、革命軍が武器を保持する事は一切明記されていなかった。ディアスのエリートたちはミゲル・イダルゴ神父の時に起こった、スペイン人大虐殺のような事態が生じるのを恐れた。マデロも程度の差はあれ、同じような恐れを抱いていたと思われる。⁶²

フアレス市を奪われたのを知り、ディアスの最高指揮官ビクトリアノ・ウエルタと国防相マヌエル・ゴンザレス・コシオはディアスの官邸を訪ねてディアスに詰め寄った。フアレスが占領されたことなどたいした事ではない、現に革命軍に占領されたアグア・プリエタは取り返したのではないか、同じことがフアレスでも出来る、と喚いた。リマントゥールが革命軍をフアレスから追い出し、殲滅するために数縦隊を派遣する大作戦を打てるほどの財力はないと反論すると、ウエルタは政府にどれだけの準備金があるかを質した。リマントゥールが余剰金は七千二百万ペソ、と答えると作戦にはそんなたいそうな金は必要ないと撥ね付けた。リマントゥールが部隊を北に回すと南部や他の地域の防衛が手薄になる、と更に反対すると、これを無視して続けた。千五百人で南部は固められ、二千の騎兵でチワワの反乱を平定できる、と嘯いた。ディアスはその気になり、南部の反乱を収めるよう命じたが、作戦開始の前にディアスは辞職し、条約に従う事になった。ウエルタの作戦は現実とそぐわないもので、政府軍を過大評価し、革命軍を過小評価していた。二千の騎兵で北の革命軍を倒す事など出来るはずはなかった。⁶³

5月21日、フアレス市条約が署名され、マデロの革命は終結した。五月末までに大統領と副大統領は辞職し、外務長官フランシスコ・レオン・デ・ラ・バッラが暫定政府の大統領になり、後日選挙を行う事になった。革命軍は州ごとに解隊され、平和が回復した。その四日後の25日、ポルフィリオ・ディアスは辞職した。⁶⁴ 六月、ディアスはパリへ逃れ1915年7月2日他界した。ヨーロッパでは裕福で穏やかであった時代の人として尊敬を集めた。しかし、ポルフィリオ・ディアス栄光の時代は否定され、彼は母国に永遠の憩いの場所を与えられず、モンパルナスの墓地に眠っている。⁶⁵

メキシコの軍事的、政治的現実を十分に理解していた多くの革命指導者は、フアレス条約に反対した。五月半ば、革命軍は地方を殆ど支配下に置いていたし、クエルナバカ、チルパンシンゴ、ドゥランゴをはじめ、多くの地域を占領していた。彼等の目には連邦軍は崩壊寸前であり、あと数週間の戦闘で全国を完全に制覇出来ると考えていた。ディアス政権を温存して、革命軍に敵対する臨時大統領に一任すれば、革命が死ぬことは目に見えていた。⁶⁶

マデロは絶頂にあった。メキシコ市に向かう列車が通過する駅では、教会の鐘が鳴り、打ち上げ花火があがる中、人々はビバ・マデロを歓呼した。6月7日の午後、マデロはメキシコ市の五分の一にあたる十万の群衆に迎えられて到着した。しかし、マデロの勝利は彼の敗退の始まりであった。彼は二つの致命的過ちを犯した。第一、当然マデロに敵対するはずのディアスの代理人フランシスコ・レオン・デ・ラ・バッラに臨時大統領を任せ、引

き続き立法府に君臨させたこと、二つめは、革命軍を解散したことにより、多くの兵士を落胆させ、革命の正当性が薄れ、マデロは軍事的支えを失ったことである。67

革命軍の勝利が確定するとビヤは辞した。その事はマデロにとって好都合であった。マデロはビヤに二万五千ペソを渡そうとしたが、金目当てではなかったと拒んだビヤは、やっと一万とも一万四千とも言われる金額を受け取った。軍事指導者の中でフアレス条約に最も激しく反対したのはビヤであった。第一の理由は、連邦政府の軍と官僚は、革命にもマデロにも反対するであろう事。二つめは、この条約は土地改革やテラサス＝クレエルに関しては何も言及されず、その上、彼の兵士については一切配慮がなされていない事であった。68

ビヤの兵士七百人はチワワ革命軍の12%でしかなかった。しかしビヤはマデロが全軍を掌握するために必要なPLMの武装解除、誰よりも強行にフアレス攻撃を主張した事など、大きな貢献をした。その後、チワワ革命指導者たちがマデロに反旗を掲げても、ビヤは最後までマデロのために武器を取った。ビヤの前歴がどうであったにせよ、ビヤの部隊は最も統制がとれていた。彼は農民が何を求め、何を恐れ、自分に期待するものは何かを良く理解し、よき代弁者であり、彼の盗賊歴を披瀝するようなものは何一つ見付からなかった。69

5月9日、バハ・カリフォルニアではウェールズ人が率いるアメリカ人部隊が、リカルドの制止を無視してティファナを占領し、無政府主義者の象徴である黒旗を国境の町に掲げた。ティファナを強奪して以来、リカルドは自分の計画が崩れて行くのを見つめていた。戦闘は大規模なメキシコ人商店の掠奪となって終了した。リカルドはロスアンゼルスから事態を收拾しようと指示を出し続けたが、彼が目論んでいた事は何一つ達成できなかった。九割がアメリカ人からなる反乱軍は星条旗とPLMの旗を掲げ、メキシコ人執行部を無視して勝手に振舞った。ウェールズの男はリカルドに金と物資の送付を要求したが、回答が来ないため、6月1日に去っていった。マデロはリカルドの兄ヘスと、マデロがディアスの刑務所から釈放したファン・サラビアをロスアンゼルスに送り、リカルド兄弟を懐柔した。農民が土地を取り返し、労働者が生産を管理出来るようになるまで、PLMは武器を放さない、とリカルドは激しく罵り返した。その翌日6月14日、警察がリヘネラシオンの事務所に踏み込み、リカルド、エンリケ両兄弟と他の二人を逮捕した。6月22日、マデロは連邦軍を送り込み、PLM軍を追放した。メキシコ人とアメリカ人の在米過激派集団は戦わずして逃げた。70

36. Enrique Krauze, "Mexico, Biography of Power, a History of Modern Mexico, 1910-1996, 1997, P255
37. John Mason Hart, "Revolutionary Mexico, the Coming and Process of the Mexican Revolution, 10th Edition", University of California Press Berkeley, 1989, P240
38. Dorothy Pierson Kerig, "Luther T. Ellsworth: U.S. Consul on the Border during the Mexican Revolution", Texas Western Press, The University of Texas at El Paso, 1975, P29
39. Enrique Krauze, "Mexico, Biography of Power, a History of Modern Mexico, 1910-1996, 1997, P256
40. Dorothy Pierson Kerig, "Luther T. Ellsworth: U.S. Consul on the Border during the Mexican Revolution", Texas Western Press, The University of Texas at El Paso, 1975, P34
41. Friedrich Katz, "The Life and Times of Pancho Villa", Stanford University Press, 1998, P90
42. James A. Sandos, "Rebellion in the Borderlands, Anarchism and the Plan of San Diego, 1910-1996, University of Oklahoma Press, 1992, P27
43. Friedrich Katz, "The Life and Times of Pancho Villa", Stanford University Press, 1998, P92
44. Friedrich Katz, "The Life and Times of Pancho Villa", Stanford University Press, 1998, P93
45. 村井謙一、「パイオニア列伝」、1975、P 17
46. Friedrich Katz, "The Life and Times of Pancho Villa", Stanford University Press, 1998, P97
47. Ibid, P98
48. Ibid, P101
49. Ibid. P94
50. Enrique Krauze, "Mexico, Biography of Power, a History of Modern Mexico, 1910-1996, 1997, P259
51. Friedrich Katz, "The Life and Times of Pancho Villa", Stanford University Press, 1998, P103
52. Ibid. P105
53. Ibid. P106
54. Ibid. P107
55. Ibid. P108
56. Enrique Krauze, "Mexico, Biography of Power, a History of Modern Mexico, 1910-1996, 1997, P259
57. Friedrich Katz, "The Life and Times of Pancho Villa", Stanford University Press, 1998, P109
58. Ibid. P110
59. Ibid. P111
60. Ibid. P112
61. Ibid. P113
62. Ibid P114-115
63. Ibid. P116

64. Enrique Krauze, "Mexico, Biography of Power, a History of Modern Mexico, 1910-1996, 1997, P259
65. Ibid. P237
66. Friedrich Katz, "The Life and Times of Pancho Villa", Stanford University Press, 1998, P116
67. Enrique Krauze, "Mexico, Biography of Power, a History of Modern Mexico, 1910-1996, 1997, P261
68. Friedrich Katz, "The Life and Times of Pancho Villa", Stanford University Press, 1998, P118
69. Ibid. P120
70. James A. Sandos, "Rebellion in the Borderlands, Anarchism and the Plan of San Diego, 1904-1923", University of Oklahoma Press, 1992, P32

[目次へ戻る](#)